



132297



日文 701562907

澤宮久孝

美華集注釋

卷第十



中央公論社

萬葉集注釋第十卷 奧附

昭和三十七年一月三十日初版 昭和四十九年九月二十日十五版

著者澤瀉久孝^{おもたけひさたか} 發行者高梨茂 印刷者山田博 印刷所株式會社三陽社 東京都板橋

區板橋四丁目四七番七号 發行所中央公論社東京都中央區京橋二丁目一番地 振替

東京三四番

定價三千八百圓

本文抄造 三菱製紙株式會社

表紙麻布 望月株式會社

製本所 小泉製本株式會社

製函所 加藤製函印刷株式會社

凡例

一、原本の傳はらない古典の注釋の底本としては、その原本の時代に近い古寫本か、世に最も廣く行はれてゐる流布本か、いづれかが用ゐられがちであるが、兩者に一長一短のある事、他の古典の場合にも既に述べられてゐるところである。

私はその兩者の長を採らうとして底本の二本立といふ事を思ひついた。定本萬葉集以來、西本願寺本を底本とする事が二三の注釋書にも行はれてゐるが、それは廿卷完備した最も古い寫本としてうなづかれる態度ながら、西本願寺本と流布本とは大體系統を同じくするものであるから、私は系統を異にする古寫本と流布本（寛永本）とを照合して、兩者の間に異同がある場合はその正しいと認めた方を採つた。従つてそのいづれか一本が誤と明瞭に認められるものは一々注を加へない。その底本とした二本以外の諸本、諸注によつて訂正したもののみ注を加へた。たとへば（京雅）摩（類）とあるは二つの底本には「霏」とあるを京大本によつて改めた事を示し、乃とあるは底本をはじめ諸本に無いが、類聚古集によつて補つたものである。

一、流布本と系統を異にする古寫本は殆ど廿卷完備したものなく、中には斷簡に過ぎないものもあるから、歌一首一首についてどの古寫本を底本としたかを注記した。それによつてその歌の古寫本がどのあたりまで溯り得るかを明らかにし、

訓詁の参考にすると共に、古寫本の新たな發見に備へる事も出来ようと考へたからである。たとへば原文の下に（類、六・六）とある歌は、桂、金、天、元等の古寫本は傳はつてゐない事を示すものである。それら古寫本の時代については正確には定め難いが、本書に底本とするに當つては次の如き順によつた。

桂、金、藍、天、元、金砂子切、類、古、紀、尼、嘉。

一、古寫本の校合は複製本のあるものはすべてそれによつた。複製本に漏れたものは原本によつた。その場合はその所在を明らかにした。陽明本と京大本とは著者みづから原本について校合を加へた透寫本（著者所藏）を用ゐた。冷泉本、金澤文庫本、細井本、大矢本は校本萬葉集の注記に従つた。

一、原文の文字は大體舊字體（當用漢字體に非ずといふ意味）を用ゐたが、誤字考察のたよりを考へて、原本又は原本に近き書體と認められるものはそれによつた。「与」(ユ)、^二「尔」(ニ)、^三「乱」(ラン)、^四「風」(フウ)の如きである。

一、原文の下に注記（類、七・一二五）は類聚古集第七卷百二十五頁の意であり、（古、五・二二才）とあるは古葉略類聚鈔第五册十二丁表の意である。古葉略類聚鈔の現存の卷は八、九、十、十二と、卷名不明の卷との五册であるが、本書では複製本にかりに一、二、三、四、五と名づけられてゐるのに従つた。

一、本文に引用の萬葉集の歌には番號を記した。（三・三三）とあるは卷三にある二五七番の歌である。卷數をあげないものはその注釋の卷の中の歌である。

一、萬葉集以外の歌集その他諸書の下に數字はすべて卷數を示す。日本書紀は卷數によらず單に神代紀上、神武紀などと記した。古事記も中卷、下卷など書かず、神武記、仁德記などと記した。伊勢物語は池田龜鑑氏の校本にも採用せられてゐる天福本の段數をあげた。新撰字鏡は天治本によつた。享和本、群書類従本によるものは（享）（群）と注した。

「倭名抄」と書いたものは倭名類聚抄十卷本であり、「和名抄」と書いたものは同、廿卷本である事を示した。高山寺本は（高）と注した。類聚名義抄は（佛、上）（法、中）など注したものは觀智院本である。色葉字類抄（上）（中）など記したものは三卷本（古典保存會刊）、伊呂波字類抄（一）（二）など記したものは十卷本（日本古典全集所収）である。

一、書名を省略して引用したものを左に掲げる。

桂	桂本萬葉集	西	西本願寺本萬葉集
金	金澤本萬葉集	細	細井本萬葉集
藍	藍紙本萬葉集	陽	陽明文庫本萬葉集（京都大學所藏。校本に溫故堂本とある觀本）
天	天治本萬葉集	矢	大矢本萬葉集
元	元曆（校）本萬葉集	京	京大本萬葉集（校本に京都帝國大學本とあるもの。曼珠院舊藏）
類	類聚古集	無	無點本萬葉集
古	古葉略類聚鈔	附	附訓本萬葉集
尼	尼崎本萬葉集	寬	寬永本萬葉集
冷	冷泉本萬葉集	仙	萬葉集註釋（仙覺抄ともいふ）
文	金澤文庫本萬葉集	仙	仙覺
壬	傳王生隆祐筆本萬葉集	拾	萬葉集拾穗抄
嘉	嘉曆（傳承）本萬葉集	管見	萬葉集管見
紀	紀州本萬葉集（校本に神田本とあるもの）		北村 季吟 下河邊長流

代 萬葉代匠記 契 沖

(引用にあたり平かなを用ゐたものは初稿本、
片カナを用ゐたものは精撰本)

新考 萬葉集新考

(安藤野雁と井上通泰と兩氏に同名の著書がある
ので、井上氏新考と記したところがあるが、
安藤氏のものは引用するところが少く、單に新
考とあるは井上氏のものである。それも歌文珍
書保存會刊行のものゝ國民圖書株式會社刊行の
ものとあり、主として前者によつたが、「増訂」
と記したところは後者によつたものである。)

童 萬葉集童蒙抄 荷田 信名

考 萬葉考 賀茂 眞淵

槻 萬葉集槻乃落葉 荒木田久老

玉 萬葉集玉の小琴 本居 宣長

略 萬葉集略解 加藤 千蔭

檜 萬葉集檜婦手 橘 守部

攷 萬葉集攷證 岸本由豆流

古義 萬葉集古義 鹿持 雅澄

註疏 萬葉集註疏 近藤 芳樹

動植正名 萬葉古今動植正名 山本 章夫

美 萬葉集美夫君志 木村 正辭

文字辨證 萬葉集文字辨證 木村 正辭

字音辨證 萬葉集字音辨證 木村 正辭

訓義辨證 萬葉集訓義辨證 木村 正辭

總索引 萬葉集總索引

新講 萬葉集新講

新訓 新訓萬葉集

講義 萬葉集講義

新解 萬葉集新解

新釋 萬葉集新釋

(伊藤左千夫氏にも同名の著がある。その場合
は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解

花田比露思

増、選 増訂本萬葉集選擇

口譯 口譯萬葉集

總索引 萬葉集總索引

新講 萬葉集新講

新訓 新訓萬葉集

講義 萬葉集講義

新解 萬葉集新解

新釋 萬葉集新釋

(伊藤左千夫氏にも同名の著がある。その場合
は著者の名をあげた。)

私解 萬葉集私解

花田比露思

佐佐木信綱

折口 信夫

正宗 敦夫

次田 潤

佐佐木信綱

山田 孝雄

武田 祐吉

澤瀉 久孝

全釋 萬葉集全釋

鴻巢 盛廣

難語難訓攷 萬葉難語難訓攷

生田 耕一

秀歌 萬葉秀歌

齋藤 茂吉

評釋篇 柿本人麿評釋篇

齋藤 茂吉

雜纂篇 柿本人麿雜纂篇

齋藤 茂吉

新見 萬葉集新見

森本 治吉

講話 萬葉集講話

澤瀉 久孝

小徑 萬葉集小徑

土屋 文明

古徑 萬葉古徑

澤瀉 久孝

作品と時代 萬葉の作品と時代

澤瀉 久孝

新校 新校萬葉集

澤瀉 久孝

定本 定本萬葉集

佐伯 梅友

定本 定本萬葉集

佐佐木 信綱

植物新考 萬葉集植物新考

武田 祐吉

動物考 萬葉動物考

上村 六郎

續動物考 續萬葉動物考

松田 修

兵庫篇 萬葉地 兵庫篇

東 光治

理研究 萬葉地 兵庫篇

阪口 德二

大和志考 萬葉大和志考

奥野 健治

山代志考 萬葉山代志考

奥野 健治

全譯 全譯萬葉集

武田 祐吉

全註釋 萬葉集全註釋

武田 祐吉

(改造社版と角川版とがある。本書は主として

前者によつたが、増訂されたところは後者によ

つた。現代かなづかひになつてゐるものは後者

よりのものである。)

評釋 萬葉集評釋

(橋田東聲氏、金子元臣氏、窪田空穂氏に同名

の書がある。本書には著者の名を附して引用し

た。)

評釋 評釋萬葉集

佐佐木 信綱

大成 萬葉集大成

(これも著者の名を附した。)

私注 萬葉集私注

平凡社 版

歌人の誕生 萬葉歌人の誕生

土屋 文明

澤瀉 久孝

古典大系本 古典文學大系本萬葉集

高木 市之助

五味 智英

大野 晋

五

一、本書へ引用の雜誌名で、同名が他にもありなどして疑問をもたれるかと思はれるものの發行所を左にあげておく。

國文學 關西大學國文學會

女子大國文 京都女子大學國文學會

山邊道 天理大學國文學研究室

一、引用の諸書の文章は文字もみだりに變更しなかつた。但、假名に一切濁點を用ゐないものは、馴れない讀者の不便を考へて濁點を加へた。仙覺抄、代匠記などの注の如きである。

一、現代諸家の論攷の題目には「」を加へ、單行本には『』を加へて區別した。

一、上代特殊假名遣については本書中それぞれの場合に當つて述べたが、初學の方の爲に、萬葉ではア行のエ(衣)とヤ行のエ(延)との區別の他に次の十二音の區別があつた事を列舉しておく。

(甲類) 伎、祢、古、蘇、刀、努、比、敝、美、賣、用、路

(乙類) 紀、氣、許、曾、止、乃、非、閑、未、米、余、呂

萬葉集注釋卷第十

萬葉集卷第十

春雜歌

雜歌七首 (八三三—八三六)	一三
詠鳥十三首 (八三九—八四三)	二二
(代)廿四	
詠雪十一首(代) (八三三—八四三)	三九
詠霞三首 (八四三—八四五)	五〇
詠柳八首 (八四六—八五三)	五二
詠花二十首 (八四六—八五三)	五八
詠月三首 (八四四—八七六)	七七
詠雨一首 (八七六)	八一
詠川一首 (八七六)	八二
詠煙一首 (八七六)	八二

野遊四首 (八八〇—八八三)	八四
歎舊二首 (八八四、八八五)	八八
權逢一首 (八八六)	九〇
旋頭歌二首 (八八七、八八八)	九一
譬喻歌一首 (八八九)	九三

春相聞

相聞七首 (八九〇—八九六)	九五
寄鳥二首 (八九七、八九八)	一〇六
寄花九首 (八九九—九〇七)	一〇九
寄霜一首 (九〇八)	一一九
寄霞六首 (九〇九—九一四)	一二〇
寄雨四首 (九一五—九一八)	一二五
寄草三首 (九一九—九二二)	一三〇

寄松一首 (一九三)		一三三
寄雲一首 (一九三)		一三四
贈縹一首 (一九四)		一三五
悲別一首 (一九五)		一三五
問答十一首 (一九六—一九七)		一三六

夏雜歌

詠鳥二十七首 (一九七—一九八)		一四七
詠蟬一首 (一九四)		一七五
詠榛一首 (一九五)		一七六
詠花十首 (一九六—一九七)		一七七
問答二首 (一九六、一九七)		一八六
譬喻歌一首 (一九七)		一八七

夏相聞

寄鳥二首	(一九七—一九八)	一八九
寄蟬一首	(一九八)	一九五
寄草四首	(一九三—一九六)	一九六
寄花七首	(一九七—一九九)	二〇〇
寄露一首	(一九四)	二〇七
寄日一首	(一九五)	二〇八

秋雜歌

七夕九十八首	(一九六—二〇五)	二〇九
詠花三十四首	(二〇四—二二七)	二一〇
詠鴈十三首	(二二六—二三〇)	二二六
(略)三 遊群十首		
詠鹿鳴十六首	(二二四—二五七)	二四七

詠蟬一首 (二三七)	三三七
詠蟋蟀三首 (二三六—二三七)	三五八
詠蝦五首 (二三六—二三七)	三六〇
詠鳥二首 (二三六、二三七)	三六二
詠露九首 (二三六—二三七)	三六五
詠山一首 (二三七)	三七二
詠黃葉四十一首 (二三六—二三七)	三七三
詠水田三首 (二三九—二三三)	四〇三
詠河一首 (二三三)	四〇五
詠月七首 (二三三—二三六)	四〇六
詠風三首 (二三〇—二三三)	四一〇
詠芳一首 (二三三)	四一二
詠雨四首 (二三四—二三七)	四一三
詠霜一首 (二三七)	四一七

秋相聞

相聞五首 (三三九—三四〇)	四一八
寄水田八首 (三四四—三五二)	四二三
寄露八首 (三五三—三五九)	四三〇
寄風二首 (三六〇、三六一)	四三四
寄雨二首 (三六二、三六三)	四三六
寄蟋蟀一首 (三六四)	四三七
寄蝦一首 (三六五)	四三八
寄鴈一首 (三六六)	四四一
寄鹿二首 (三六七、三六八)	四四二
寄鶴一首 (三六九)	四四四
寄草一首 (三七〇)	四四四
寄花二十三首 (三七二—三九〇)	四四八
寄山一首 (三九四)	四六四